

列王記第一20章 「甘えの信仰」

1A 憐れみの勝利 1-21

1B アラムの脅威 1-12

2B 預言者の指導 13-21

2A 不従順の刈り取り 22-43

1B 不実な契約 22-34

2B 叱責の聞けない心 35-43

本文

おはようございます。今朝はいつもと異なり、午後礼拝に行なっている一節ずつの聖書講解を行ないたいと思います。私たちの聖書通読は、前回、列王記第一 19 章まで来ました。エリヤが、バアルの預言者と対決し、その後、イゼベルの脅しによってエリヤが、なんとシナイ山まで逃げていきます。そこでかすかな細い神の声を聞き、続けてイスラエルに戻って働きをしなければいけないことを告げられます。

そして20章以降ですが、列王記第一の最後22章にかけて、アハブ王がいかにして神の裁きを受けていくのか、その経緯を見ていきます。三年間の飢饉、そして主からの火によっていけにえを焼き尽くす姿を見、アハブは主なる神の証しを目撃してきました。それでも、彼は主に仕える決意をしませんでした。そしてついに、アラム軍の手によって彼は死に絶えます。この裁きがどのように行なわれるかを22章までに見ていきます。

今日の説教題は、「甘えの信仰」です。私が信仰を持ったのは1989年のことですが、その時にちょうど「信仰と『甘え』」という本が出版されていました。(同じ著者、土井健郎氏の「甘えの構造」という本が非常に有名です。)日本において、信仰が甘えの対象になるという内容であったと記憶していますが、私は自分の信仰に存分に甘えがあるということを感じました。その中で強烈に記憶に残っている箇所は、放蕩息子のことです。彼は、放蕩の限りを尽くした後、愛する父のところに戻り、そのままの彼を父は受け入れましたが、読者の多くがそこで大きな誤解をしているそうです。私たちは、「神はそのままの自分を受け入れられる」と理解し、そして「今、していることは何でも受け入れてくれる」というように理解を変えていきます。

けれども著者は、こう指摘したのです。息子の悔い改めの言葉がこうなっています。「**立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」**(ルカ 15:18-19)」子と呼ばれる資格はなくなったことを十分に受け入れた中で、父のもとに行ったのです。つまり、天国に行く資格はありません。地獄に行かなければいけないのです。このことを受

け入れた者こそが、父なる神のところに行くことができ、キリストにある神の慈愛を受けることができる、ということです。

20章そして21,22章の話を読みますと、アハブにあったのはこの「甘え」でした。アハブがバアル崇拝という罪を犯していたにも関わらず、主が憐れみを示して、預言者たちを遣わし、ヤハウエこそが神であることを示していきました。けれども、彼は自分のわがままを捨てることができませんでした。この甘えについて考えながら読んでいきたいと思います。

1A 憐れみの勝利 1-21

1B アラムの脅威 1-12

20:1 アラムの王ベン・ハダデは彼の全軍勢を集めた。彼には三十二人の王と、馬と戦車とがあった。彼はサマリヤに上って来て、これを包囲して攻め、20:2 町に使者たちを遣わし、イスラエルの王アハブに、20:3 言わせた。「ベン・ハダデはこう言われる。『あなたの銀と金は私のもの。あなたの妻たちや子どもたちの最も美しい者も私のものだ。』」

ここから列王記はしばらく、イスラエルとアラムの戦いの記録を示しています。アラムはシリアの古代名です。ソロモンの王政の後期に、レゾンという略奪隊の長がソロモンに反逆し、ダマスコを支配したことを読みました(1列王 11:23-25)。その次の王がベン・ハダデー世です。ユダの王アサが、北イスラエルの王バシャと戦う時に、ベン・ハダデと同盟を結んで、彼に北イスラエルの町々を攻めてもらった話を私たちは読みました。

そして私たちが今読んだのは、ベン・ハダデー世の息子、ベン・ハダデ二世です。彼は同盟を結んでいる他の都市国家の32人の王と、非常に大きな軍隊をもって、北イスラエルの首都サマリヤを包囲しました。そして、金銀と妻子の人質を要求しました。

20:4 イスラエルの王は答えて言った。「王よ。仰せのとおりです。この私、および、私に属するのはすべてあなたのものです。」20:5 使者たちは再び戻って来て言った。「ベン・ハダデはこう言われる。『私は先に、あなたに人を遣わし、あなたの銀と金、および、あなたの妻たちや子どもたちを私に与えよ、と言った。20:6 あすの今ごろ、私の家来たちを遣わす。彼らは、あなたの家とあなたの家来たちの家とを捜し、たとい、あなたが最も大事にしているものでも、彼らは手に入れて奪い取るだろう。』」20:7 そこで、イスラエルの王は国のすべての長老たちを呼び寄せて言った。「あの男が、こんなにひどいことを要求しているのを知ってほしい。彼は人を遣わして、私の妻たちや子どもたち、および、私の銀や金を求めたが、私はそれを断わりきれなかった。」20:8 すると長老たちや民はみな、彼に言った。「聞かないでください。承諾しないでください。」20:9 そこで、彼はベン・ハダデの使者たちに言った。「王に言ってくれ。『初めに、あなたが、このしもべに言ってよこされたことはすべて、そのようにするが、このたびのことはできません。』」使者たちは帰って行って、このことを報告した。

金銀と妻子の人質までの要求は呑みましたが、王宮にあるものを全て略奪する権利を与えるということは拒みました。長老たちは、このようなことをされたものならイスラエルの主権を喪失すると思ったのでしょう。

20:10 するとベン・ハダデは、彼のところに人をやって言させた。「サマリヤのちりが私に従うすべての民の手を満たすほどでもあったら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」20:11 そこでイスラエルの王は答えて言った。「彼にこう伝えてくれ。『武装しようとする者は、武装を解く者のように誇ってはならない。』」20:12 ベン・ハダデは、このことばを聞いたとき、王たちと仮小屋で酒を飲んでいましたが、家来たちに、「配置につけ。」と命じたので、彼らは、この町に向かう配置についた。

傲慢な振る舞いをしているベン・ハダデに対して、抵抗する姿勢を見せました。そこでベン・ハダデはこれがアラムと交戦する意思表示だと解しました。

2B 預言者の指導 13-21

20:13 ちょうどそのころ、ひとりの預言者がイスラエルの王アハブに近づいて言った。「主はこう仰せられる。『あなたはこのおびただしい大軍をみな見たか。見よ。わたしは、きょう、これをあなたの手に引き渡す。あなたは、わたしこそ主であることを知ろう。』」

主は、憐れみを示してくださっています。預言者が彼に近づく、ということは、主がそれだけ彼に語りたいたいということです。この章には、他に二人の預言者が現れますが、それは主が彼に語ろうとされている表れです。バアルの預言者との対決において、ご自身を火によって示されましたが、それでも主に近寄らない彼に対して、戦いにおいて奇跡的な勝利を与えることによって、ご自身を彼に伝えようとされています。「あなたは、わたしこそ主であることを知ろう」と主は言われます。

ところで、この章でエリヤは出てきません。21章で出てきます。22章にも出てこず、ミカヤという預言者が出てきます。私たちは前回学びましたね、オバデヤがかくまっていた百人の預言者がおり、バアルに七千人の残された者がいました。エリヤだけでなく、主はこうした多くの預言者を用いられていました。

20:14 アハブが、「それはだれによってでしょうか。」と尋ねると、その預言者は言った。「主はこう仰せられる。『諸国の首長に属する若い者たちによって。』」アハブが、「だれが戦いをしかけるのでしょうか。」と尋ねると、「あなただ。」と答えた。20:15 彼が諸国の首長に属する若い者たちを調べてみると、二百三十二人いた。そのほか、民の全部、すなわちイスラエル人全部を調べたところ、七千人いた。

ここの「諸国の首長に属する若い者」というのは、新共同訳では「諸州の知事に属する若者た

ち」となっています。他国の首長ではなく、イスラエル国の諸州の首長に属する若者たちのことです。そして人数が、たった二百三十二人、そしてイスラエルの民で戦えるのはたった七千人です。

20:16 彼らは真昼ごろ出陣した。そのとき、ベン・ハダデは味方の三十二人の王たちと仮小屋で酒を飲んで酔っていた。20:17 諸国の首長に属する若い者たちが最初に出て行った。ベン・ハダデが人を遣わしてみると、「人々がサマリヤから出て来ている。」との報告を受けた。20:18 それで彼は言った。「和平のために出て来ても、生けどりにし、戦うために出て来ても、生けどりにせよ。」20:19 町から出て来たのは、諸国の首長に属する若い者たちと、これに続く軍勢であった。20:20 彼らはおのおのその相手を打ったので、アラムは逃げ、イスラエル人は追った。アラムの王ベン・ハダデは馬に乗り、騎兵たちといっしょに、のがれた。20:21 イスラエルの王は出て来て、馬と戦車を分捕り、アラムを打って大損害を与えた。

ベン・ハダデは、かなりの酒飲みです。このために判断力を鈍らせてしまい、初動を誤ってしまいました。そしてイスラエルがアラムに大損害を与えることができました。

2A 不従順の刈り取り 22-43

けれどもすぐに、預言者がアハブに忠告します。戦いはまだ続くので、油断してはならないことを伝えます。

1B 不実な契約 22-34

20:22 その後、あの預言者がイスラエルの王に近寄って来て言った。「さあ、奮い立って、これからなすべきことをわきまえ知りなさい。来年の今ごろ、アラムの王があなたを攻めに上って来るから。」

「来年の今ごろ」というのは、来年の春と訳すことができます。イスラエルでは冬季に雨が降ります。土がぬかるむので、戦いに適さなくなります。大抵、当時、戦をするときは春先でした。

20:23 そのころ、アラムの王の家来たちは王に言った。「彼らの神々は山の神です。だから、彼らは私たちより強いのです。しかしながら、私たちが平地で彼らと戦うなら、私たちのほうがきっと彼らより強いでしょう。20:24 こういうようにしてください。王たちをそれぞれ、その地位から退かせ、彼らの代わりに総督を任命し、20:25 あなたは失っただけの軍勢と馬と戦車をとをそれだけ補充してください。彼らと平地で戦うなら、きっと私たちのほうが彼らより強いでしょう。」彼は彼らの言うことを聞き入れて、そのようにした。

非常に興味深い助言です。アラムの王の家来たちは、全地の主、天地を造られた神を知りませんでした。イスラエルの神は、イスラエルだけの神であり、その神とアラムの神が戦っているとみなしていたのです。当時の戦いは、その国を代表する神と相手の国を代表する神の戦いと考えられ

ていました。聖書には、このように多神教の信仰に対して、主ご自身が、「わたしこそが神である」ということを言わしめる証しに満ちています。例えば、ダニエル書です。ネブカデネザルが見た夢を、だれも言い当てることができず、呪術者や知者らがこう言いました。「肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。(2:11)」肉なる者とその住まいを共にする神々というのは、まさにここアラム王の家来たちが考えている神々のことです。被造物を超越する神がおられるということ、イスラエルの神、ヤハウェはご自身で明らかにされます。

そして私たちは、多神教の信仰を持っていなくても、家来と同じ過ちを犯すことがあります。主が行なわれていることであるのに、「これこれが原因だったから、このことが起こったのだ。」「このやり方が間違っていたから、こうなったのだ。だから方法を変えればよいのだ。」など、方法論に傾き、主ご自身の目を向けることができないことがあります。主はただ、ご自身に叫び求めてほしいと願っているだけなのに、そうしないことがあります。山の神だから、平地で戦おうと言っているのと同じです。

20:26 翌年、ベン・ハダデはアラムを召集し、イスラエルと戦うために、アフエクに上って来た。
20:27 一方イスラエル人も召集され、糧食を受けて出て行き、彼らを迎えた。イスラエル人は彼らと向かい合って陣を敷いた。彼らは二つの群れのやぎのようであったが、アラムはその地に満ちていた。

「アフエク」という同名の町がいくつかありますが、このアフエクはガリラヤ湖の東にある所です。今のゴラン高原にあり、比較的平坦なところです。そして、人数が圧倒的に違いました。イスラエルは二つの群れの山羊のようでしたが、アラムは地に満ちていました。

20:28 ときに、ひとりの神の人が近づいて来て、イスラエルの王に言った。「主はこう仰せられる。『アラムが、主は山の神であって、低地の神でない、と言っているの、わたしはこのおびたしい大軍を全部あなたの手に渡す。それによって、あなたがたは、わたしこそ主であることを知るであろう。』」

先の預言者の他に、この神の人が現れました。そして、先の預言者と同じことを告げます。このおびたしい大軍を全部あなたの手に渡す、それによって、「あなたがたが、わたしこそ主であることを知るであろう」であります。

20:29 両軍は互いに向かい合って、七日間、陣を敷いていた。七日目になって、戦いを交えたが、イスラエル人は一日のうちにアラムの歩兵十万人を打ち殺した。20:30 生き残った者たちはアフエクの町に逃げたが、その二万七千人の残った者の上に城壁がくずれ落ちた。ベン・ハダデは逃げて町にはいり、奥の間にはいった。20:31 家来たちは彼に言った。「イスラエルの家の王たちは

あわれみ深い王である、と聞いています。それで、私たちの腰に荒布をまとい、首になわをかけ、イスラエルの王のもとに出て行かせてください。そうすれば、あなたのいのちを助けてくれるかもしれません。」

圧倒的な勝利です。戦いを交えなくとも、主は城壁を崩れ落ちるようにされました。けれども、ベン・ハダデは何とか生き延びます。そして家来たちが彼に助言したのですが、イスラエルの王たちは主の前で悪を行なったと言えども、異邦人の王のような残虐なことはしませんでした。手足を切断したり、目を抉り出したり、皮を剥いだりするなど、残虐行為はイスラエルの王たちはしていませんでした。その憐れみにすがろう、という助言です。

20:32 こうして彼らは腰に荒布を巻き、首になわをかけ、イスラエルの王のもとに行つて願つた。「あなたのしもべ、ベン・ハダデが、『どうか私のいのちを助けてください。』と申しています。」するとアハブは言った。「彼はまだ生きているのか。彼は私の兄弟だ。」20:33 この人々は、これは吉兆だと見て、すぐにそのことにより事が決まったと思ひ、「ベン・ハダデはあなたの兄弟です。」と言つた。王は言った。「行つて、彼を連れて来なさい。」ベン・ハダデが彼のところに出て来ると、王は彼を戦車に乗せた。20:34 ベン・ハダデは彼に言った。「私の父が、あなたの父上から奪い取つた町々をお返しします。あなたは私の父がサマリヤにしたように、ダマスコに市場を設けることもできます。」では、契約を結んであなたを帰そう。」こうして、アハブは彼と契約を結び、彼を去らせた。

アハブは、とんでもない過ちを犯しました。主が、この戦いにおいてアラムに大損害を与えることによって、主こそが神であることを彼が知らなければいけません。アハブがここでしなければいけないことは、ベン・ハダデを殺すことです。42 節に、主がアラムの王を聖絶することを意図しておられたことが書かれています。それを彼は行ないませんでした。そして殺さないだけでなく、彼を兄弟と呼び、自分の戦車にまで乗せました。これは友好の印です。そして寛大に接しただけでなく、契約まで結びました。契約において、かつて父ベン・ハダデー世がアサの要請にしたがって取つていった町々を返還し、またダマスコにおける経済活動を許すという内容でした。

ここだけ読むと、これがそこまで悪いことなのか？と思われるかもしれません。寛大に接することは、イスラエルの王の高潔さを示していることではないか？と思われるかもしれません。けれども、事はそんな単純ではないのです。いま話しましたように、主はベン・ハダデが死ぬことを望まれていました。まず、それを行なわなかったという不従順があります。

これだけでも問題なのですが、主の命令には理由があります。アラムは今後もイスラエルを頻繁に攻撃していくのですが、自分の国の背後で、次第にアッシリヤという大きな国が力を増し加えていました。アラムはイスラエルと手を結び、これに対抗するという意図を持ってきました。事実、この出来事の三年後、聖書には載っていませんが、紀元前 853 年、アラムとイスラエルがアッシリヤと戦い、アッシリヤの王を撃退します。そして紀元前 734 年、アラムの王とイスラエルの王が手を

組んで、ユダの国を攻めます。なぜなら、ユダが彼らのアッシリヤに抵抗するための同盟に乗ってこなかったからです。けれども、アッシリヤはアラムを滅ぼし、そしてイスラエルも滅ぼします。イスラエルはアラムと手を結んだために、アラムと同じ運命を辿ったのです。ダマスコが廃墟となるという預言がイザヤ書 17 章にあります。そこにイスラエルも倒れることが預言されています。

このような神の知恵と御心があって、神が命令されていたのです。それにも関わらずアハブはこの勝利をもてあそんだのです。彼は自分の寛大さを示しながら、この契約が美味しかったのです。アラムと手を結べば、アッシリヤに自分たちも対抗できるという思惑がありました。寛大さを装いながら、実は自己中心的な思いを成し遂げたいという計算が働いていたのです。

私たちがここから何を学ぶことができるでしょうか？主がせっかく、ご自分の証しを私たちに与えてくださっているのに、それを自分の欲のために用いることがあるのだ、ということです。具体的な例えで説明しましょう。次の話は作り話です。私はやっていません、あくまでも仮定の話です。私が伝道者として、いろいろな人に伝道しているとします。そして、主がたくさんに魂の収穫を与えてくださっています。時に、きれいな女性が教会に来ました。私は、その人にもいつもと同じように伝道しました。すると、彼女が悩みを言い出します。そして今度、レストランで会ってほしいと言われます。私はそこに行きました。そして、またどこかで二人で会いたいと言ってきました。彼女は、もっとイエス様のことを聞きたいと言いながら、実は行なっていることは私を誘惑していることでした。私は、そのことがうすうす分かっていながら、この人と一緒にいるのが心地よくなってきました。これを何と言いますか？そう「姦淫」です。しかし、表向きは「キリストの優しさと愛を示す、福音伝道者」として動いているように見えます。

ここには二つの悪があります。一つは、「主の命令をないがしろにすること」です。主は、「**悪はどんな悪でも避けなさい。(1テサロニケ 5:22)**」と言われました。けれども、心で姦淫の罪を犯し、行動でも犯しかねない状況に陥っています。そうなのに、「私がいなければ、この人の魂は救われない」と自分に言い聞かせ、また言い張って、その命令に逆らっているのです。もう一つは、「主のものを自分のものにする」という盗みの罪です。アハブの場合は、主がベン・ハダデは聖絶されなければいけないと言われたのに、それを自分のものにしました。同じようにその女性は主のものであって、私のものではありません。だから、伝道を続けるなら初めから自分の妻を同席させ、また、他の姉妹に任せることによって断ち切る必要があります。自分よりも、主のほうが賢いのです。

聖書の中にも同じ話しが出てきますね。サウルが、アマレク人を聖絶しなさいという主の命令に従わず、王アガグを生かし、家畜の最良のものを残していました。それに対して預言者サムエルは、主の御声に聞き従わないことは偶像礼拝の罪だ、と言いました(1サムエル 15:23 参照)。サウルは、主のために捧げるために家畜を残したのだと言いましたが、アハブが行なったのと同じです。主のものを自分のものにしたいという欲望にしか過ぎませんでした。

2B 叱責の聞けない心 35-43

そこで次に主は、また違う預言者を遣わされます。

20:35 預言者のともがらのひとりが、主の命令によって、自分の仲間に、「私を打ってくれ。」と言った。しかし、その人は彼を打つことを拒んだ。20:36 それで彼はその人に言った。「あなたは主の御声に聞き従わなかったので、あなたが私のもとから出て行くな、すぐ獅子があなたを殺す。」その人が彼のそばから出て行くと、獅子がその人を見つけて殺した。20:37 ついで、彼はもうひとりの人に会ったので、「私を打ってくれ。」と頼んだ。すると、その人は彼を打って傷を負わせた。20:38 それから、その預言者は行って道ばたで王を待っていた。彼は目の上にほうたいをして、だれかわからないようにしていた。

以前、若い預言者が主の命令に背いて、獅子によって殺されてしまったことがありました。そのままユダに帰らなければいけないと主に命じられていたのに、年老いた預言者の「食事をしよう」という誘いに乗ったからです。けれども、なぜここまで厳しいのか？今、ここで一国の行く末を決める王に対する神の言葉を伝えなければいけません。この重要な責務を預言者は担っており、そこに自分の感情や思いで止めさせたり、そのメッセージを歪めることはできないのです。新約時代の聖書教師も重い責任を負っています。「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。(ヤコブ 3:1)」一人の教師が自分の感情や思惑で伝えないこと、また歪めることがあるならば、それはキリストの教会に対して甚大な被害をもたらします。多くの魂を地獄に迷わせ、導くことさえあるのです。だから、格別に厳しい裁きがあるのです。

20:39 王が通りかかったとき、彼は王に叫んで言った。「しもべが戦場に出て行くと、ちょうどそこに、ある人がひとりの者を連れてやって来て、こう言いました。『この者を見張れ。もし、この者を逃がしてもしたら、この者のいのちの代わりにあなたのいのちを取るか、または、銀一タラントを払わせるぞ。』20:40 ところが、しもべが何やかやしているうちに、その者はいなくなっていました。」すると、イスラエルの王が彼に言った。「あなたはそのとおりにさばかれる。あなた自身が決めたとおりに。」20:41 彼は急いで、ほうたいを目から取り除いた。そのとき、イスラエルの王は、彼が預言者のひとりであることを見た。

これは、かつてナタンがダビデに対して行なった預言と同じです。ダビデがウリヤの妻バテ・シェバを奪い、ウリヤを殺した罪について、貧しい人が飼っていた一匹の雌羊を、金持ちが奪い取って、旅人のためにそれをほふつてもてなしたという話を聞いて、ダビデが「その男は死罪だ」と言ったあとに、ナタンが「その男はあなたです」と言いました。今、アハブは自分自身の言葉で自分を罪に定めたのです。

20:42 彼は王に言った。「主はこう仰せられる。『わたしが聖絶しようとした者をあなたが逃がした

から、あなたのいのちは彼のいのちの代わりとなり、あなたの民は彼の民の代わりとなる。』
20:43 イスラエルの王は不きげんになり、激しく怒って、自分の家に戻って行き、サマリヤに着いた。

預言者は、アハブがベン・ハダデに代わって死ぬことを告げましたが、これは 22 章で実現します。そして、このことを聞いたアハブの反応がここの章の最も重要な点です。「**不きげんになり、激しく怒っ**」たとあります。これは何でしょうか？自分のしていること、自分の思っていることがはっきりと否定されたので、それに対して怒ったのです。簡単に言えば、「甘ったれ」であります。主の叱責を聞くことのできない、肥大化した自我です。

また例えをお話しします。こちらは実話です。ある女性が自分の通っている教会の牧師に、結婚のことで相談しました。牧師は自分の感じていたことを率直に話しました。もちろん御言葉に基づいた助言です。そうしたら、次の週から礼拝に彼女は現れません。ついに彼女はずっと教会に来なかったのです。後で他の人から聞きましたが、その時に彼女は非常に怒ったそうです。自分の選んだ結婚相手を否定されたので、非常に怒り、教会に来なかったのです。彼女が相談と言っていたのですが、それは嘘で、自分の思っているを牧師に同意してほしかっただけだったのです。

これが、信仰の甘えです。自分の思いや感じていることを、主の戒めの言葉の前で下ろすことができません。自分のしていることを受け入れてもらうよう要求するのです。預言者サムエルがサウルに言ったように、これは偶像礼拝に他なりません。木や石の偶像は拜んでいないかもしれませんが、心の中に自分を中心とする世界を形成しているので偶像礼拝なのです。

神の愛を知るには、冒頭でお話しした通り、「お前が悪いのだ」という神の言葉を受け入れるところから始まります。イエス様は、ラオデキヤにある教会に、「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。(黙示 3:19)」と言われました。イエスの愛を知る者は、この懲らしめを受け入れて、へりくだる者です。主は、自分を憎んでいるから懲らしめるのではないのです。むしろ、神の子供になるための招きをしているのです。

なぜ神の愛が十字架というものにあるのか？あのむごい、反逆罪や殺人罪を拷問で懲らしめる手段が神の愛なのか？あなたが神に反逆したのだ、死に値する罪を犯したのだ、というメッセージがあるからです。もし神が私たちのしていることを受け入れることが愛ならば、神は十字架ではなく、御子に柔らかなベットにでも用意してくださったことでしょう。いいえ、私たちが罪人であることを、十字架は否が応でも知らせます。聖霊は、皆さんに罪を犯したことを知らせます。その罪が深ければ深いほど、十字架という神の懲らしめの意義も深まります。そこにある痛みを通して、私たちは主の愛を、私たちの魂を真に癒す愛をいただくことができるのです。